

Vocales 再論

岩 熊 幸 男

Vocales という呼称が 12 世紀初頭に現れた。普遍論争以降のことである。〈論理学の対象は音声 vox である〉、なかでも〈普遍は音声である〉と主張する者のことであった。より伝統的で権威あるとされた〈普遍はもの res である〉という考えを採る者らが、アベラールとその追隨者に与えた貶称であった。12 世紀中葉には両陣営はそれぞれ nominales / reales と呼ばれるようになり、reales は四学派 (Parvipontani, Porretani, Albricani, Meludinenses) に分かれた。これら五学派は、普遍問題のみならず論理学全域について異なった説をたてて対立した。これら五学派を担った人々は 12 世紀末葉までにすべて絶える。しかし、nominales という名称と彼らの唱えたいいくつかの「奇妙な」教説 (普遍説を含む) は、13 世紀を通じて否定的に言及され続けた。こうして伝えられた普遍説を、14 世紀にオッカムが新たな視点から再興し、reales の説と対抗する。これが、近世以降の哲学用語としての「実念論 realism」「唯名論 nominalism」の始まりである。14 世紀以降の論争では存在論的問が中心であった。しかし、12 世紀の論争では存在論が主要な論点であった訳ではない。12 世紀普遍論争の前史を明らかにすることを通して、以下それを論じる。

本論では二つの新資料を用いる。その一つは『範疇論』注解 (C8¹¹) であり、シャンポーのギョームが 12 世紀初頭に著したものと筆者は推定している。もう一つは、筆者がリモージュ・テキストと呼ぶもので、十の範疇を論じた (注釈ではない) 11 世紀末の著作である。いずれの著作にも文献学上で論じるべき問題が多くあるが、ここでは触れない。また、これら未刊著作の校訂本文と

その詳細な解釈についても他にゆずりたい²⁾。本論では、それらの研究の結果わかった結論のみを素描する。

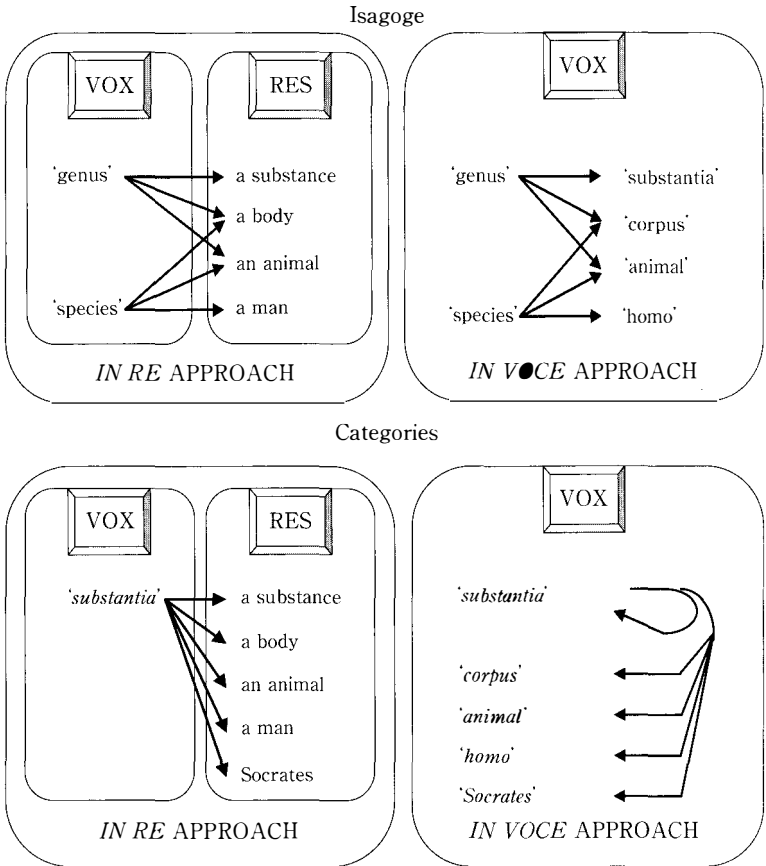
§1. 11世紀末葉には、〈自由三科（文法学・論理学・修辞学）はすべて vox を共通の対象とする〉という考えが広く認められていた。しかし、論理学教程の最初に置かれたポルピュリオスの『エイサゴゲ』とアリストテレスの『範疇論』は例外であって、vox ではなく res が論究対象であると考えられていた。それに対して、これらの書物も他の論理学書と同じく vox を論究対象にしている、と解する一群の論理学者が1080年頃に現れた。12世紀の *vocales* の直接の祖先である。彼らを本論では *proto-vocales* と呼ぼう。

ポエティウス他の古代の伝統に従えば、『エイサゴゲ』で論じられる「類」「種」等は res である。たとえば、ポルピュリオスが類を論じるときには《動物》などの res を、種を論じるときには《人間》などの res を論じているのである。それに対して、*proto-vocales* によれば、ポルピュリオスは「類」「種」等という vox そのものを論じているとされる。このような解釈は11世紀末葉には *in voce* と、古代の伝統に従う解釈は *in re* と呼ばれるようになった。

アリストテレス『範疇論』の場合は事態はやや複雑になる。というのは、ポエティウスの『範疇論注解』に依れば、アリストテレスが論じているのは十の res ではなく、それら res を意味するところの「実体」「量」「質」等の十の *voces* である、とされているからである。従って、ポエティウスに従う限り *in re* な解釈のもとでも、『範疇論』の論究対象は res ではなく vox であるということになる。この点で *in re* な解釈と *in voce* な解釈は一致する。しかし、*in voce* な解釈ではさらに強い主張が含意されていた。範疇とは *in voce* には「音声の集まり *collectio vocum*」と定義される。とすれば『範疇論』の論究対象は、たとえば「実体」のみならず、その下にある「物体」「動物」「人間」「ソクラテス」などもすべて vox のレベルで理解すべきことになる。

ここで、*in re* / *in voce* な解釈の対立点を図式化しよう。この対立点は、当初は必ずしも明確に意識されたものではなかったが、シャンプーのギョームと

アベラールの論争を通して徐々に明らかになったものである。



『エイサゴゲ』では、in reな解釈によれば、「類」という語はres《動物》等を、「種」という語はres《人間》等を意味し、ポルピュリオスはそれらのresを論じている。それに対してin voceな解釈によれば、「類」「種」等というvoxの意味対象は《動物》《人間》等のresではなく「動物」「人間」等というvocesであり、ポルピュリオスはそれらのvocesを論じているとされる。『範疇論』では、「実体」等の十のvocesが論究されるとする点では両解釈に違

いはない。しかし、in reな解釈に依れば、「実体」という vox は res (《実体》《物体》《動物》《人間》《ソクラテス》等) を意味し、アリストテレスはそれら res を論じている。それに対して、in voceな解釈に依れば、「実体」という vox は、voces (「実体」「物体」「動物」「人間」「ソクラテス」等) を意味しており、アリストテレスはそれらの voces を論じているのである。(「実体」「物体」「動物」「人間」「ソクラテス」等という voces がそれぞれ《実体》《物体》《動物》《人間》《ソクラテス》等という res を意味していることは proto-vocales といえども前提している。ここで否定されているのは、「実体」「量」「質」等の voces が直接に res を意味する、という in re 解釈の考えである。「実体」はまず「実体」「物体」…「ソクラテス」等の voces を意味するのであり、それら意味された voces が次に res を意味するのである。特に、「実体」という vox は、「物体」…「ソクラテス」等の下位の voces のみならず、「実体」という vox 自体をも意味することになるが、この奇妙な帰結はそのままに容認される。)

以上から明らかな通り、両解釈の対立は存在論には何ら関わらない。存在論上では、両解釈とも普遍の存在を素朴に前提している。「実体」「物体」「動物」「人間」等という voces は、それぞれ、《実体》《物体》《動物》《人間》等という res を意味しており、それら res は、vox 「ソクラテス」が意味する個物とは何らかの点で異なった普遍的な res である。その普遍的な res とはいかなる res であるか、これが後の普遍論争で戦われることになる論点であるが、そのような問題意識はこの時点では未だない。

§2. リモージュ・テキストについて注目すべき点は、ポエティウスの『範疇論注釈』とは無縁に範疇理解が展開されていることである。二例のみ挙げる。

1) 「実体」の範疇に「物体」「動物」「人間」等の他に 'albus' や 'rationale' という voces をも含めている。(そして 'albedo' 'rationalitas' 等の voces が「質」の範疇に属するとされる)。なぜなら、'albus' や 'rationale' という voces はその基体 (たとえば白く理性的なソクラテス) を意味しており、基体とはと

りもなおさず実体に他ならないからである。(それに対して, 'albedo'等は基本抜きで付帯性だけを意味している)。2) リモージュ・テキストは, vox を aer であり, 従って物体であり実体であると主張している。これはプリスキアヌス『文法学教程』冒頭の定義 (vox est aer tenuissimus ...) に依るものであり, ボエティウスの『命題論第二注釈 (p. 4.18)』での定義 (vox est percussio aeris ...) とは一致しない(ボエティウスの定義を基に, vox とは質=実体 aer が持つ percussio という質=である, とする説が後に現れる)。以上の事実から推定するに, proto-vocales はボエティウスの注釈に依拠することなく(恐らくは知らないままで), 独自の解釈を展開していた。

それに対して, ボエティウスの注釈が全面的に使われていること, これがシャンボールのギョームの一連の注解 (P3, C8, H11)³⁾に共通に見られる特徴の一つである。それも引用という通常形ではない。ボエティウスの語句が, 多くの場合それと断らずにそのまま逐語的に随所に引き写されているのである。とはいえ, これをボエティウスからの剽窃と考えるべきではない。ギョームはボエティウスの注釈に従っている旨を隠しだてはしていない。むしろ, アリストテレス解釈において全面的にボエティウスの注釈(特に、『エイサゴゲ』と『命題論』では第二注釈, それ以前ではより初歩的な第一注釈の方が重視されていた)に忠実に従うという論理学教授のスタイルを始めて確立したのがギョームであったと理解すべきである。ギョームの論理学者としての盛名は, ひとつにはこのスタイル(新しい, とはいえ古来の権威ある伝統に従ったスタイル)の確立にあったと考えられる。

§3. アベラールは proto-vocalis として 1100 年頃にパリにやって来た。特に、『範疇論』に関しては, アベラールの『範疇論注解 (C5⁴⁾』には, リモージュ・テキストと極めて似通った解釈が展開されている。

アベラールが proto-vocales の教説をパリにもたらして以降, ギョームはそれを始めて真剣に検討し始めた。アベラールのパリ到着以前に書いた『エイサゴゲ注解 (P3)』⁵⁾では, proto-vocalism については全く言及されていない。例

えば、ポルピュリオスが『エイサゴゲ』で論じているのは類種等の五つの *res* である、と述べるのみで、「類」「種」等を *voces* であるとする *proto-vocales* の説には言及すらしていない。しかるに、『範疇論注解 (C8)』では考えを修正して、ポルピュリオスの論究対象を *res* のみだとする説をも *voces* のみだとする説をもともに退け、どちらの説にも諸権威の後ろ盾があるのだから両者ともをポルピュリオスは論じているのだ、と *proto-vocalism* を包摂する立場に移行している。(ポルピュリオスの論究対象は *res* であって *voces* ではない、と *reales* が強く否定し始めるのは普遍論争以降のことである)。

範疇理解においても、ギョームは *proto-vocales* の教説を包摂している。「実体」という *vox* の用法を三区区分する。1) *res* 指示的 *in designatione rerum* 用法では、「実体」は、《実体》《物体》《動物》《人間》《ソクラテス》等の *res* を意味する。2) *vox* 指示的 *in designatione vocum* 用法では、「実体」は、「実体」「物体」「動物」「人間」「ソクラテス」等の *voces* を意味する。3) 「実体」は *aer* を意味し、その限りでは任意の *voces* (「実体」…「ソクラテス」等のみならず、‘*albus*’ や ‘*albedo*’ 等の付帯性を意味する *voces* も、それらが *aeres* という物体である限りで) を意味する。ここに2)と3)の用法は、上記のリモージュ・テキストに見られた *proto-vocales* の実体理解を反映したものに他ならない。以上の三区区分のうえで、ギョームは *res* 指示的用法が基本であり、*vox* 指示的用法は *res* に依拠して *gratia rerum* 二次的に成立するものであるとする。そして、『範疇論』のテキストの大半を *res* 指示的に解釈し、それが不可能な場合(例えば第一実体と第二実体の区別)に限って *vox* 指示的な解釈を与える。

それに対してアベラールは、C 5の残存部分から判断する限り、ギョームに対抗して *vox* 指示的解釈を(つまりは *proto-vocalis* としての解釈を)可能な限り押し進めようとしていた。注目すべきことに、その際にアベラールには上記2)と3)の用法の混同が見られる(これはリモージュ・テキストでも同様である)。さらにギョームの *res* 指示的解釈に対する *quidam* の反論に C 8は何カ所かで言及しているが、それらの反論は常に2)と3)の用法の混同の故

である、とギョームに一蹴されている。いいかえれば、ギョームが 3) の用法を 1) 2) から区別したのは、proto-vocales の側のこの混同を指摘する意味があったわけである。但し、3) の用法は、1) の res 指示的 (aer という res を指示しているから) とも、2) の vox 指示的 (voces を指示しているから) とも解することが可能で、その位置づけはギョームにあっても曖昧なままに残されている。この曖昧性をめぐっては後に問題が生じることになる。

§ 4. 数的に一でありながら反対物を受け入れうること *contrariorum susceptibile esse*, これが実体範疇の特有性だとアリストテレスは論じている (Cat. 5, 4a10-b19)。たとえば、ソクラテスという実体は、数的に一でありながら健康／病気という反対物を受け入れる。この実体の特有性に関する可能な反論をアリストテレスは考察する。命題⁶⁾もまた、数的に一でありながらも、反対物 (真／偽) を受け入れるように見える。この反論に対してアリストテレスは自ら答える。実体が反対物を受け入れる場合には、例えば、ソクラテスが健康から病気になる場合には、ソクラテス自身が変化する。それにたいして、命題が反対物を受け入れる場合には、例えば、「ある人が座っている」という命題が真から偽になる場合は、命題自身は変化せずに、事柄 res (ソクラテスが座っているかどうか) の方が変化する。実体の場合とは反対物の受け入れ方が異なっているので、命題についての議論は反論として成立しない。

この実体の特有性をめぐって、res 指示的解釈を採るギョームと、vox 指示的解釈を採るアベラールとの間に論争が白熱する。アベラールは proto-vocalism の持っていた含意を究極まで押し進めることによって、この論争で一定の勝利をおさめる。と同時に、proto-vocalism 自身が持っていた弱点が結果としてあらわになることによって、アベラールの論理学は新たな地点への飛躍を余儀なくされる。すなわち、彼は proto-vocalis から vocalis へと変貌することになる。

§ 5. Proto-vocales にとって、実体とはあくまで voces の集まりである。

その voces に平行して res の世界がある。この基本的立脚点から、「実体が反対物を受け入れる」に対して、リモージュ・テキストとアベラールの C5 は複雑な解釈を与える。「実体」とは、例えば「ソクラテス」という vox である (res ではない)。「反対物 (contraria permutabilia と呼ばれる)」とは、例えば「健康な 'sanus'」／「病気の 'aeger'」という voces である。vox 「ソクラテス」が voces 「健康な」／「病気の」を受け入れる場合、その原因 causa は、'sanus'/'aeger' という voces の意味対象たる res 《健康 sanitas》／《病気 aegritas》である。res のレベルでは《健康》／《病気》がソクラテスを基体 subiectum として内属する。それに応じて vox のレベルでは、「ソクラテス」を主語 subiectum として「ソクラテスは健康で／病気である」と言われ、この命題の中で vox 「ソクラテス」は voces 「健康な／病気の」を受け入れている。以上の解釈で用いられている permutabilia や causa などの用語は、ポエティウスには全く現れない proto-vocales に特有なものである。

リモージュ・テキストは、命題 oratio を実体から除外するために「自らの本性において in sui natura」という条件を追加した。ソクラテスが健康から病気になる場合はソクラテス自身が本性上変化するのであるが、命題「ソクラテスは座っている」が反対物（「真」／「偽」）を受け入れる場合は命題自体は本性上変化しないからである。このアイデアを発展させて、アベラールは C5 (pp. 57.41-59.35) で述べる。まず、命題を除外するための追加条件を、アリストテレス自身の言葉 (Cat. 5, 4b17, 4b3) に従って「自ら変化することによって secundum sui mutationem」に変更する。その上で次のように述べる。「実体」（たとえば「ソクラテス」）が反対物（たとえば「健康な」／「病気の」）を受け入れる原因 causa は、その意味対象たる《健康》／《病気》という res である。それに対して、命題（たとえば、ある特定の命題 haec oratio 「ソクラテスは座っている Socrates sedet」）が反対物（真／偽 'vera'/'falsa' という voces）を受け入れる原因は、「ソクラテス」の意味対象たるソクラテスという res でも「座っている」の意味対象たる《座》という res でもなく、ソクラテスという res が《座》という res を受け入れているかどうか、言い換えれば命題「ソ

クラテスは座っている」の意味対象〈ソクラテスが座っている／いないという事態 *Socratem sedere/non sedere*〉である。ここに萌芽をみせた〈命題の意味対象〉という新しい問題は、*dictum*⁷⁾ *propositionum* という用語で後にアベラールが詳論することになる。

§6. 以上の *proto-vocales* の解釈に対して、ギョームは C8 で大筋でポエティウスに従い、§4 に述べたと同様の単純で自然な解釈を与えている。但し、命題を実体から除外するために「自らが変化することによって」という追加条件が必要である（ポエティウスは明言していない）とする点で、ギョームは *proto-vocales* の説に従っている。他方、この特有性を有するのは、*res* 指示的な「実体」であって、二次的に *vox* 指示的な「実体」にも適用できる、とした。さらに、「自らが変化することによって」という条件によって除外された命題がいかなる範疇に属するかについては、アリストテレスもポエティウスも明言はしていないが、少なくとも実体の範疇には属しないと考えていたことは明らかであり、ギョームも同様である。

ところで、命題 *oratio* がいかなる範疇に属するかをめぐっては、別の問題があった。リモージュ・テキストでは、先述した (§2) ように、*vox* とは *aer* であり、従って実体であるとされていた。ところで、アリストテレス (*De int.* 4, 16b26) は、*oratio* を *vox significativa ...* と定義している。従って、*oratio* は *vox* の種であり、実体であることになる。他方で、アリストテレス (*Cat.* 6, 4b23) は量の範疇の例として *oratio* を挙げている。従って *oratio* は、その類である *vox* と共に、量でもあることになる。リモージュ・テキストは、*vox* や *oratio* は同名異義的で、実体をも量をも意味するとした。

「自らの変化によって」という条件でアリストテレスが除外した命題 *oratio* は、それではどちらの範疇に属するのか、リモージュ・テキストもギョーム (C8) もそれを明言していない。*oratio* は（ひいては *vox* は）実体なのか量なのか？ この問を背景として、実体の特有性をめぐってギョームとアベラールの論争が始まる。

§7. 実体の特有性に関するギョームの res 指示的解釈にアベラールは反論した。その反論を C8 は次のように報告している。(1) oratio が量であると仮定する。すると、oratio は付帯性であるから、いかなる反対物も受け入れるはずがない。付帯性 (oratio) が付帯性 (反対物) を基体として受け入れることはありえないからである。従って、oratio が真/偽という反対物を受け入れることもありえない、という不合理な結論が生じる。従って oratio は量ではない。(2) 他方で、oratio が実体 (aer) であると仮定する。すると、「自己自身が増加することによって反対物を受け入れる」ことは実体の特有性ではないことになる。oratio は、実体であるにもかかわらず、自己自身が増加することによって反対物 (真/偽) を受け入れないことになるからである。この結論はアリストテレスの主張に反する。(3) 議論 (2) は「実体」を res 指示的に解するときには成立しない。「実体」を res 指示的に解すれば、oratio は aer であり、aer は実体として任意の反対物を受け入れる。ところが、アリストテレスが論じているのは、真/偽という特定の反対物のみであって、任意の反対物を問題にしているのではない。(4) 従って、「実体」は vox 指示的に解すべきである。oratio は、aer である限りでは確かに実体である。しかし、「oratio」という vox の意味対象 (たとえばソクラテスが座っていること) という事態は実体ではない。従って、「oratio」という vox は、vox 指示的な「実体」には含まれない。vox 指示的な「実体」に含まれる vox (たとえば「人間」) はその意味対象である res (たとえばソクラテス) が実体である場合に限られるからである。

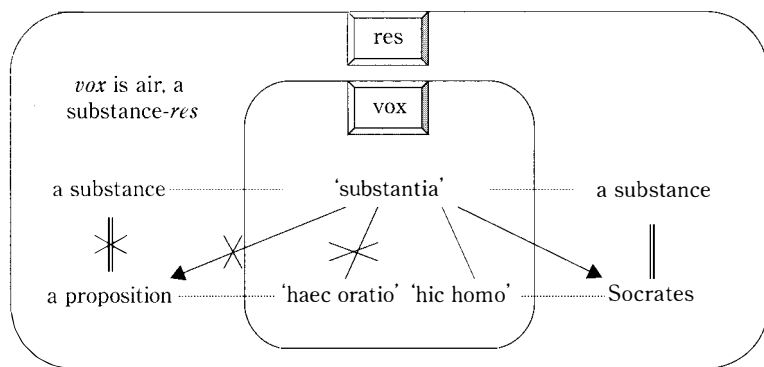
以上の C8 の報告から次の点が明らかである。oratio (ひいては vox) は実体か量かという問に対して、ギョームはすでに oratio が実体であることを否定しているのであるから、〈oratio は量である〉という説を採らざるを得なかった。他方アベラールは、ギョームに対抗して〈oratio は実体である〉という説を採った。アベラールはギョームの量説を (1) で反駁し、ギョームはアベラールの実体説を (2) で反駁した。その (2) に対してアベラールは、(3) でギョームの res 指示的「実体」解釈を反駁し、(4) で vox 指示的「実体」

解釈の優位性を主張した。

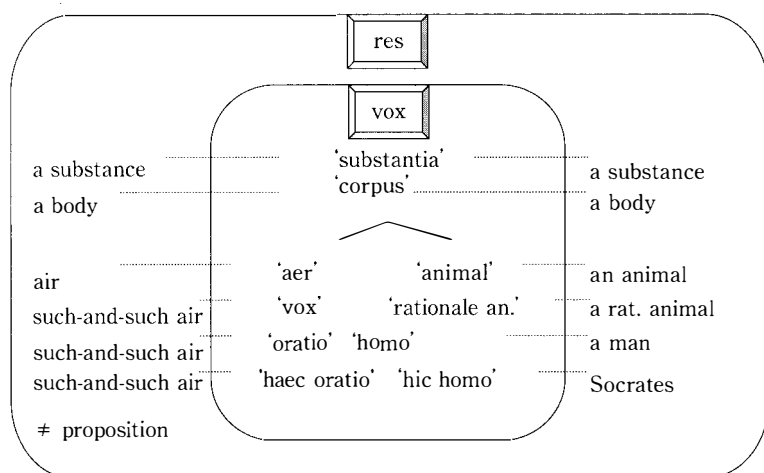
C8 は、アベラールの反論を報告するのみで、ギョームの側からの解答を記していない。ギョームは、vox 指示的解釈 (proto-vocalism) の正しさを主張するアベラールの反論に対して、res 指示的解釈の立場から答えることができなかったのである。

§ 8. アベラールはこうして、一方では〈oratio / vox は実体である〉と主張し、他方では〈oratio は実体でない〉と主張したことになる。一見相矛盾するこの主張はどうして可能になったのか？ Proto-vocalism を徹底化することによって、である。アベラールにとって論理学とは徹頭徹尾 vox に関する学になった。そこに登場する用語はすべて、res 指示的ではなく vox 指示的に解釈されねばならない。例えば、ポルピュリオスの木は、「実体」という vox とその下位の voces 「物体」「動物」「人間」「ソクラテス」等から成る (res からではない)。「実体」という vox は、「実体」という vox それ自身および下位の voces を意味する (res を意味するのではない)。上位の voces は下位の voces に述語される (res が res に述語されるのではない) 等々。現代論理学に類推を求めるとすれば、vox 指示的論理学とはいわば形式体系である。ここでは、記号 (とりあえず意味を剥奪された) のみしか現れない。vox 指示的論理学が res に言及することがあるとすれば、いわば、形式体系のモデル (in re モデルと呼ぼう) としてである。意味を剥奪された記号に in re モデルが意味を付与する。こうして徹底化された proto-vocalism の観点から見れば、〈oratio / vox は実体 (aer) である〉という主張は形式体系についてのメタ理論的な主張である (「形式体系で用いられる記号はインキの染である」というメタ理論的主張に相当する)。それに対して、〈'oratio' は「実体」ではない〉という主張は形式体系内部の主張である。従って、両主張はレベルを異にしており、相矛盾しないのである。'oratio' という vox は実体である。なぜなら、vox はすべて aer という物体であるから。'oratio' は「実体」ではない。なぜなら、in re モデルにおいて 'oratio' に付与される意味は、実体 aer ではなく、

たとえば〈ソクラテスが座っていること〉という事態なのであるから。



しかし、この徹底化された proto-vocalism は内部矛盾を孕んでいた。〈vox は実体 (aer) である〉と主張することがメタ理論的な立場から正しいとする。すると、形式体系内部でもその事実を反映していなければならない。とすれば〈'vox' という vox は 'aer' という vox の下位にある〉が成立する。つまりは、形式体系内部でも、'vox' は 'aer' であり、従って「実体」でなければならない。さらにまた、'vox' が 'aer' であり 'oratio' が 'vox' であるとすると、'oratio' に



in re モデルが付与する意味対象は、〈これこれ様の aer〉でなければならない。「人間」という vox に in re モデルが付与する意味対象は〈これこれ様の（すなわち理性的な）動物〉でなければならないように、とすると 'oratio' の意味対象は〈ソクラテスは座っていること〉等の事態ではもはやあり得ない。

§9. アベラールは§7 に述べた議論を展開した直後に、§8 で述べた内部矛盾にみづから気付いた。C8 には、もう一つのギョームへの反論が記録されており、こちらの反論ではアベラールは§8 の矛盾点を回避している。

「自らが変化することによって」という条件は命題を排除するためである」という考えは、リモージュ・テキストが定式化し、アベラール自身もかつて C5 で主張し、ギョームもそれに従ったものである。アベラールは、この考えを最終的に否定し、この条件は命題を排除するためには不必要なものであるとする。アリストテレスがこの条件について論じたのは、命題に関する反論を頑固に言い張る人々を論駁するためだけであって、理論的に必須な条件ではない。なぜなら、命題（例えば「ソクラテスは座っている」）は、真である場合と偽である場合とでは異なった命題であるからである。というのは、もし命題 oratio が量の範疇に属するとすると、アリストテレスが主張する (Cat. 6, 5a34) ように「(量である oratio は) 一旦発話されてしまうと二度と捉えることができない」からである。他方、命題が実体の範疇に属するとすると、同じ命題がパリとローマで同時に発話された場合、同一の実体 (命題) が同時に二カ所に存在する、という不合理な結論が生じる。(いずれの議論も、後にアベラールが *Dialectica* (pp. 53.34-54.34) で述べるのと実質的に同じである)。従って、命題は、実体であるにせよ量であるにせよ、発話毎に異なったものであって、数的に一でありながら反対物を受け入れるものではそもそもなかったのである。

言語現象を考える際には token / type のレベルが区別される。言葉は、同一の type であっても、発話毎に異なった token である。上記のアベラールの議論は、明らかに token のレベルでなされている。各 token は発話し終わった瞬

間に消滅する。同一 type の命題も、異なった時間・場所で発話されれば異なった token である。

Vox を token のレベルで考えるということは、vox を aer（振動する空気）として考えるということに他ならない。「ソクラテスは座っている」という命題-token は振動する空気（aer）に過ぎない。〈ソクラテスは座っている〉という事態はもはや命題-token の意味対象ではない。事態を意味対象とするのは、「ソクラテスは座っている」という命題-type であるからである。従って、事態は実体にも量にも他のいかなる範疇にも最早属さないことになる。そして、まさにそのことをアベラールは *Dialectica* (pp. 157.13-160.36) で詳細に論じている。

ことばを token のレベルで考えるということは、しかし、別の問題を孕んでいる。「人間」という vox が token でしかないならば、そして種（普遍）が vox であるならば、「人間」という種（普遍）は発話の数だけ存在していて同一の種ではないということになる。この問題に対しては、アベラールは当初から気付きながら、満足な答に到達したのは後期のポルピュリオス注解 *LNSP* に至ってであった。そこで始めて、普遍が vox であることが否定され、普遍は *sermo* であるとされた。vox という語は発話-token（空気の振動）を含意するのに対し、*sermo* という語は発話-type を含意するからである。

§ 10. アベラールは、§ 7 の議論から § 9 の議論へと飛躍した際に、vox 指示的な解釈 (proto-vocalism) を完全に放棄した。*Dialectica* 以降の著作では、〈vox は vox を意味する〉というような奇矯な vox 指示的主張は完全に姿を消す。vox が意味するのは *res* である。これはある意味でギョームの *res* 指示的解釈への屈服であった。しかし、完全降伏ではない。ギョームにとって『エイサゴゲ』や『範疇論』は vox を手段とはするものの、つまるところ *res* についての教説に過ぎなかった。それに対してアベラールは今や、vox と *res* に等量の注意を払って、両者間の意味論的關係に焦点をあてることになる。vox 指示的解釈を完全に放棄して始めて、アベラールには全く新しいタイプの問を立て

ることが可能になった。ポルピュリオスが「類」「種」という vox で意味している res とは一体何であるのか？この問こそが、12 世紀の普遍論争の出発点となったものである。

この問は、よく言われるようにポルピュリオスの問から直接に導かれたものではない。アベラールが独自に提出した問である。普遍論争以前にこの問が議論されていることを示す史料は存在しない⁸⁾し、普遍論争後の現存するすべてのポルピュリオス注解で、この問はポルピュリオスの問への序論として、しかしあくまで別個の論題として議論されている。

また、この問は第一義的には存在論に関わるものではない。可感的な res は個物しか存在しない（これはギョームも認めている）とすれば、「類」「種」という voces を res 指示的に解する場合、その意味対象たる res とは一体何であるのか？この意味論的問が本来の出発点なのであり、〈質料的 essentia がその res である〉とするギョームの解答に矛盾点を指摘したのが普遍論争であった。普遍論争後に書かれた *Dialectica* でもアベラールは *res universales* という語を肯定的に用いるのを躊躇していない (pp. 185.12, 186.16, 202.9, 574.18)。つまりこの時期のアベラールは、存在論上では、何らかの res が普遍であることを未だ否定してはいなかった。ただ後になってから、status 論（「人間」という vox の意味機能の成立基盤として *hominem esse* をいう status を立てる）という一種の存在論を展開することになるのである。この status 論は、命題の意味対象 *dictum* についての理論（「ソクラテスは人間である」の *dictum* は〈ソクラテスが人間であることという事態 *Sortatem hominem esse*〉であるとすると）という *Dialectica* ですでに展開された理論と密接な関わりがある。status も *dictum* もアリストテレスの十範疇のいずれにも属さず、その意味で何ものでもないもの *non aliquid* であった。

普遍論争は、アベラールが郷里ブルターニュからパリへ帰還してすぐに始まった。とすれば、その前史をなす実体の特有性をめぐる論争は、ブルターニュ帰郷以前のパリ滞在期になされたことになる。この論争では、アベラールはギョームに一定の勝利をおさめながら、同時に自己撞着から proto-vocalism を

放棄せざろう得なかった。郷里プルトーニュでアベラールは、普遍をめぐる新しい問をもってギョームへの新たな攻撃を準備した。この時アベラールは、新たな基盤に立つ論理学者 vocalis へと変貌を始めていた。

注

- 1) 古論理学に対する注釈に対する言及は以下のリストの数字に従う。John Marenbon, “Medieval Latin Commentaries and Glosses on Aristotelian Logical Texts, before c. 1150 A. C.”, Ch. Burnett (ed.), *Commentaries and Glosses on Aristotelian Logical Texts: The Syriac, Arabic and Medieval Latin Traditions*, London 1993, pp. 77-127. (John Marenbon, *Aristotelian Logic, Platonism and the Context of Early Medieval Philosophy in the West*, Aldershot 2000 に増補を伴って再録)。
- 2) 拙論 “Vocales Revisited”, *The Word in Medieval Logic, Theology, and Psychology*, T. Shimizu and Ch. Burnett (ed.), Turnholt, forthcoming.
- 3) これらの注釈がギョームの著であることは、拙論 “Pierre Abélard et Guillaume de Champeaux dans les premières années du XII^e siècle: une étude préliminaire”, *Langage, sciences, philosophie au XII^e siècle*, J. Biard (ed.), Paris 2000, pp. 93-126 参照。
- 4) Ed. Dal Pra, *Pietro Abelardo: Scritti di logica*, Firenze 1969², pp. 43-67.
- 5) Ed. Iwakuma Y., “Pseudo-Rabanus super Porphyrium (P3)”, *AHDLM* 75 (2008), forthcoming.
- 6) 「命題」と並んで「判断」についてもアリストテレスは言及しているが、以下の議論には関わらないので本論では取りあげない。
- 7) アベラールの dictum は、ストア論理学の lekton と奇しくも表現まで一致しているが、ストアの用語はラテン中世に伝えられなかったので、アベラールが独自に思いついたものであると考えられる。
- 8) アンセルムスの『みことばの受肉について』で言及されるロスケリヌス批判の有名な一節は、存在論的な枠組みではなく、本論で述べた proto-vocalism 批判として解釈することが十分に可能である。